麻酔科学　研修で経験が望ましい項目（minimum requirement）

	手技と数値目標	日付	回数
A	マスク換気が一人で行える（18 例）		
A	指導医の介助のもと気管挿管及び声門上器具を用いた高度な気道確保が行える（15 例）		
A	末梢静脈路及び末梢動脈へのライン確保が行える（18 例）		
A	適切な人工呼吸器（麻酔器）の呼吸設定が行える（15 例）		
B	指導医の介助のもと腰椎穿刺を行い、脊椎麻酔を行える（3 例）		
B	超音波ガイド下を含めて末梢静脈路及び末梢動脈へのライン確保が行える（35 例）		
B	指導医の介助のもと超音波ガイド下での中心静脈カテーテル留置が行える（2 例）		
B	指導医の介助のもと体幹の超音波ガイド下末梢神経ブロックを行える（3 例）		
C	指導医の介助のもと分離肺換気用気管チューブを挿管し、分離肺換気を行える（4 例）		
C	指導医の介助のもと 6 歳以下の小児の麻酔導入・管理を行える（4 例）		
C	（該当する症例があれば）困難気道に対して気管支ファイバーを用いた気管挿管を行うことができる（1 例）		
C	指導医の介助のもと下部胸椎以下の硬膜外麻酔を行うことができる（3 例）		
C	指導医の介助のもと超音波ガイド下の四肢の末梢神経ブロックを行うことができる（3 例）		
	知識		
A	手術に臨む患者の不安に寄り添い、理解を示すことができる		
A	術前の合併症から最適の麻酔を選ぶことができる		
A	責任の範囲をはっきりさせることができる		
A	トラブルに見舞われた際には直ちに上級医に相談することができる。		
A	術前回診を行い、麻酔を行う上でのリスク評価を行うことができる		

A	比較的小さな手術麻酔の術中管理を行うことができる（血圧低下の際の昇圧薬投与や麻酔薬の投与量の調整を伴う）		
A	状況に応じた適切な輸液の選択、速度の調整を行うことができる		
B	術前回診を行った際に自分の責任の範囲で患者の質問に答えることができる		
B	指導のもと輸血が予想される程度の大手術の麻酔管理を行うことができる		
B	輸血を行う判断をし、輸血の際のチェック項目をもれなく記載することができる		
C	指導のもと症例検討で発表でき、内容によっては新潟麻酔懇話会または麻酔科関連学会での発表を行うことができる		

A　　4 週間で経験することが望ましい
B　　8 週間で経験することが望ましい
C　　12 週間で経験することが望ましい